

第3章 政治改革・当面の課題

第1節 概要

第1章ではシャングリラについて書いた。シャングリラとは、今では雲南省の都市名になっているが、本来は、理想郷のことである。

第1章で述べたように、松贊林寺（ソンツェンリン寺）は、この地域のチベット人にとっての精神的拠り所となる巨大な僧院である。

そして、松贊林寺（ソンツェンリン寺）を中心として、シャングリラのチベット民族は、ヤン・リービンさんの言うような理想的な生活をしているからこそ、シャングリラは理想郷なのであろう。松贊林寺（ソンツェンリン・ゴンパ）の趣を見て、私はそう思わざるをえない。梅里雪山も信仰と深く結びついている。

そもそも理想郷とは何か？

理想郷とは、和製漢語であり、これをきっちり説明している辞書はないようだ。中国では、「無何有郷」（むかうのきょう）という言葉があるが、これは 荘子が逍遙遊（しょうようゆう）篇で述べている言葉であり、老子や荘子が理想とした世界・郷（さと）のことである。

老子の道とは、どんな定義にも収まらない宇宙の原理であるが、強いて言えば全てを生み出す「天下の母」のようなものである。荘子は、その「道」というものを「撻寧（えいねい）」と呼んでいる。撻寧とは、万物と触れあいながら自らは安らかでいることである。

荘子が逍遙遊（しょうようゆう）篇で述べている「無何有郷」（むかうのきょう）とは、自然のままに、何の作為もない理想郷、つまり想像上に描かれた理想的な世界のことである。つまり、現実には決して存在しない理想的な世界・郷（さと）のことであり、老子や荘子は、常にこうした状態に身を置こうとした。

英語のユートピアとは、理想郷や「無何有郷」も含めて、いろいろな意味で使われているが、理想郷とは、老子や荘子が理想とした世界・郷（さと）のことであり、その定義はない。定義がないと私の話を進めることができないので、私は、この際、「雲南省にある都市シャングリラのような地域」と定義しておきたい。

雲南省のシャングリラがそうであるように、理想郷とは、風光明媚であり、そこで信仰心に満ちた祈りの生活が行われているところで、観光地となっているところである。

中国には大変多くの観光地があるが、雲南省のシャングリラのような風光明媚で、かつ、中国人の生活文化を感じることでできる観光地はそれほどあるわけではない。

したがって、第二第三のシャングリラをつくることは、中国の国土政策上大事なことである。シャングリラは、世界における国土づくりの理想となる。第二第三のシャングリラをつくることによって、それを中国が示すのだ。世界のどの国もこういうことはなしえない。

中国のチベット支配にともなって発生した各種の問題を「チベット問題」という。中国政府とチベット亡命政府の間で発生した過去の歴史認識に関してさまざまな議論がなされてきたし、現在でもなお問題がないわけではない。

過去の歴史認識とは、チベットに対する中華人民共和国の支配・統治にともなって生じる各種の問題である。特にチベット独立運動への弾圧、弾圧にともなう中国軍によるチベット人の大量虐殺や人権侵害が大きな争点である。この中国軍による弾圧については、国際的には、中国側の自制を求める意見が強いが、中国の立場からすると、一連のチベット人による動乱は「反乱」であり、「虐殺」は反乱分子の「平定」とされる。国際的に中国側の自制を求める意見が強いとしても、チベットの独立を主張する国際世論はないので、チベット側としては、「高度な自治」を志向するしか方法はない。これがどうなるか、その問題が現在の「チベット問題」である。

私の見通しとしては、チベット側と中国側の話し合いを重ねて、双方が歩み寄れば、「高度な自治」の実現が可能な段階に来ている。したがって、チベットにおける中国の政治改革の最大の課題は、台湾と香港の一国二制度に関わる問題であろう。しかし、この問題の解決には相当の年月を要するであろう。台湾と香港の場合、歴史的なものを考えれば一国二制度をとらざるをえないかもしれないが、この極めて重要で、かつ、難しいこの一国二制度という政治改革の問題は、私の能力を超えており、私は、その方向を指し示すことはできない。今後、習近平と蔡英文の叡智に待つよりほかはないのではないか？ したがって、ここでは政治改革の当面の課題として、宗教改革の方向についてのみ述べることにしたい。中国が国際社会における尊敬を勝ち取るには、第二第三のシャングリラをつくることしか方法がないのではないかと思われる。では、第二第三のシャングリラをつくるにはどうすればいいか？ そのことについて書いたのがこの第3章である。

中国の中央政府は、現在、無神論の立場をとって、けっこう厳しいコントロールを行っている。それはそれで良いとして、今後は、民族宗教の保護育成を積極的に行うことが望ま

しい。特に、漢民族の道教とチベット民族のチベット仏教は、中国の発展のみならず世界平和に大きく貢献することができると思うからだ。

中国中央政府の支援のもと、道教とチベット仏教がより盛んになれば、道教寺院やチベット仏教寺院を中心として、第二第三のシャングリラができるであろう。

宗教こそ理想的な生活を支える基（もとい）である。現在、中国政府は無宗教の立場を取っているが、中国政府は、将来、民族の宗教というものを大事にしてさらなる発展を遂げて欲しいと思う。シャングリラは、そういうことを気づかさせる理想郷なのである。自然景観が美しいというだけではない。

第2節 チベット仏教とは

1、歴史

7世紀前半、吐蕃のソンツェン・ガンポ王（在位：581年 - 649年）がチベット統一を果たすと共に、唐とネパールから嫁いだ2王妃、文成公主とチツン（中国語版、英語版）の勧めで仏教に帰依した。吐蕃の首都ラサにはトウルナン寺（ジョカン、大昭寺）が建立された。

ティソン・デツェン王（在位：742年 - 797年）の代には仏教が国教と定められ、国立大僧院サムイェー寺が建設されて、インドのナーランダ大僧院（那爛陀寺）の長老シャーンタラクシタが招聘された。また、パドマサンバヴァが密教を伝えた。さらに、786年には敦煌から禅僧摩訶衍（まかえん）がチベットに招かれたが、シャーンタラクシタの弟子カマラシーラと摩訶衍の禅宗との間で論争（サムイェー宗論）が行われた結果、カマラシーラのインド系仏教が正統とされた。以来、サンスクリット語経典をチベット語へ翻訳する事業が始められ、824年頃までかけて膨大なチベット大蔵経が作られた。

吐蕃末期には、国家仏教の支配体制に揺らぎが生じた。最後の王ラン・ダルマは仏教勢力の排除を目論んで廃仏を行い842(846?)年に暗殺されたという伝説が伝えられている。王家が地方に四散した後は、チベットは長い分裂時代を迎えた。

王朝が滅亡して統制がなくなると、チベット仏教も一時退廃を見せた。

11世紀になると、インドから入国して仏教界を指導したアティーシャ（在位：982年 - 1054年）とその弟子のドムトン（英語版）らによって戒律復興運動が起こり（カダム派（英語版））、出家教団が再興された。般若経の解釈学、唯識や如来蔵思想の研究、中観思想の二派[4]の論争など、顕教の哲学研究が盛んになった。他方、マルパ（中国語版、英語版）訳経師とミラレパラによって新たにインドのナローパ（中国語版、英語版）やマイトリーパ（英語版）直伝の後期密教（ナローパの六法（中国語版、英語版））がもたらされた（カギユ派）。

1240年、チベットはモンゴル帝国の侵攻を受けたが、当時ツァン地方を中心に一大勢力を持っていたサキヤ派はモンゴルの懐柔を得ることに成功し、チベットの自治支配権を得た。この時代に、チベット仏教はモンゴル諸部族に広く浸透した。

1368年の元朝崩壊後はサキヤ派に替わってカギユ派系のパクモドゥ派が中央チベットに政権を確立した。パクモドゥ派政権の衰退後は、同じくカギユ派系のカルマ派と、新興のゲルク派が覇権を争った。サキヤ派やパクモドゥ派は、宗教貴族と化した一族が座主や高僧を半世襲的に輩出する氏族教団であったが、対してカルマ・カギユ派は化身ラマ（転生ラマ）制度を導入した。ゲルク派ものちに化身ラマ制度を取り入れ、ダライ・ラマ、パンチェン・ラマの二大活仏を中心として勢力を伸ばした。この時代の有力宗派は、モンゴル諸部族や明朝と代わる代わる同盟関係を結んだ。特にモンゴルの諸ハーンは、元朝の後継者としてチベット仏教の保護者となることで権威付けを図った。

1642年までにオイラト八部のひとつホシュート部の部族長・のグシ・ハーン（グシ・ハン）がチベットの大部分を征服してダライ・ラマの権威の下にグシ・ハン王朝を樹立し、ダライ・ラマ5世を擁立して宗派を越えたチベットの政治・宗教の最高権威に据えた。

以来、ダライ・ラマを法王として戴くチベット中央政府、即ちガンデンポタンが確立された。これにともない、ダライ・ラマが元来所属していたゲルク派は、グシ・ハン王朝のみならず、隣接するハルハ、オイラトなどの諸国からもチベット仏教の正統として遇され、大いに隆盛となる。一方、覇権争いに敗れた他宗派勢力は辺境に勢力を確保し、ブータンにカギユ派系のドゥク派政権、シッキムにニンマ派政権が成立した。

モンゴルと交流のあった女真族（満州族）から出た清朝は、モンゴルの諸ハーン王朝の後継者としてチベット仏教の保護者を以て任じ、雍正帝によるグシ・ハン王朝滅亡後は、ダライ・ラマ政権の直接的バックボーンとなった。一方で、チベットの内外政の他、法王位の継承なども清朝の干渉を受けるようになった。しかし清皇族をはじめとする満州族にはチベット仏教に篤く帰依する者も多く、宗教活動自体は保護を受ける面が強かった。

2、チベット仏教の価値

チベット仏教と日本の仏教との違いの主要な点は、まず経典の数にある。

チベット仏教のほうがインドに近かったために日本よりもはるかに膨大な数の経典がもたらされ、サンスクリット語から直接チベット語に翻訳された。その正確さと現在まで残っている量の多さは、日本仏教をはるかに超えている。

しかもオリジナルであるサンスクリット語の経典がすでに消滅していることも多いので、チベット語版というのはとても貴重なのである。

法華経、華嚴経、浄土三部経、大日経・金剛頂経、般若経などが日本の仏教のメインである。チベットにも当然これらのお経は現存するが、決してメインではない。そこらへんが2つの仏教の大きな違いであろう。

一方、チベットはインドに留学して仏法を師匠から直接学んでくるチベット人も多かったため、お経の解釈体系も実に豊富である。しかもその教えの系譜は現在に至るまで途絶えることなく、多くの優れた学僧や博士を世に出している。しかも実際に修行をやった結果、優れた行者が数多くいる点がある。

違いの二つ目は、戒律に対する考えの違いがある。

日本には現在、比丘戒や沙弥戒といった釈尊の時代から続く戒律の流れがない。鑑真和上が唐からもたらした戒律は日本の長い歴史の中で途絶えてしまった。大きな原因は天台宗（最澄）が創始した大乘戒壇だが、たとえば僧侶が妻帯したりお酒を飲むといったことは「律経」（釈尊が規定した戒律）からは考えられないことであったが、これが日本仏教の世界でも類を見ない特色になってしまうのである。チベットでは現在でも戒律（説一切有部）の系譜は途切れることなく続いている。

違いの三つ目は、密教の存在と研究・修行の程度の違いである。

日本では真言宗と天台宗が大日経・金剛頂経に依拠した密教の法脈があるのみだが、チベットでは古訳派、新訳派ともに膨大な量の密教経典とその灌頂の法脈が現在にまで伝えられている。なんていっても底辺が違いすぎるのである。

違いの四つ目は、「宗派」という概念が異なるという点だ。

日本では同じ仏教であるにも関わらず、たとえば浄土宗の僧侶は真言宗では教えを受けないし、日蓮宗が天台宗に教えを受けに行くこともない。セクト間の争いはあっても交流がないのが日本仏教の奇妙な部分だが、チベット仏教ではこういうことはない。自由に交流はあるし、学問的な論争はセクト間ではあるけれど、教えを学ぶのに宗派間の壁というのは日本ほどはないのである。

1つの宗派で特定の経典だけを重んじるというのが日本仏教だが、チベット仏教では中観、唯識、律部、般若と幅広く仏教の経典を学びさらには密教へと進むのである。宗派間で細かい見解の違いは多少あるが、仏教のベースは同じなので宗派間で切磋琢磨して学問を深めることができる。

それでは、チベット仏教の神秘性についてその実例を紹介しておきたい。これは最近の出来事であり、しかも重要な歴史的出来事であると思うので、「チベットのケツン先生」の話詳しく紹介しておきたい。「チベットのケツン先生」とは、中沢新一がそう呼んでいるチベットの名僧・「ケツン・サンボ」のことである。中沢新一の著書「チベットの先生」（平成27年2月、角川ソフィア文庫）には、次のように書かれている。すなわち、

『 ゴンボ先生（正式名はジェラマ・ゴンボ・リンポチェといい、非常にすぐれた密教の行者で、サンボ先生の先生である。）とともに、1943年の秋、私（ケツン先生）たちは大きな巡礼の旅に出発した。』

『 その年の10月21日のことである。チェロカ地方に向かった私（ケツン先生）たちの一行は、ウーカルタクという土地に着いた。ここはその昔、グル・リンポチェの妃であったイエシェ・ツォギャルが深い瞑想の中で、虹の身体をあらわしたという、まことに神聖な土地だった。私たちが石ころだらけの山道を登って、その聖地にたどり着いたとき、空の雲がびっくりするほどにまばゆい、虹のような色彩を発光したのだ。雲はゆっくりと変化しながら、さまざまな不思議な形をあらわした。私たちはみんな、「ほお！！」と賞賛の声をあげた。ゴンボ先生も目を細めて、この光景を見入っておられた。「見てごらん。あの雲、まるで捧げものを持った天女みたいじゃないか」仲間の若い修行者の一人が叫んだ。見るとたしかに、美しい衣を風になびかせた天女、手に捧げものを入れた器をうやうやしく捧げ持って、天空を見上げている姿が、オレンジ色に染まった雲の中からあらわれてくるようなのだ。その雲がゆっくり空を流れていく様子は、本当にうっとりするほど美しかった。輪郭もくっきりと浮かび上がった、向こうの山の頂きには、壮麗な虹の色を映した薄い雲が、長々と天空に向かってたちのぼりときおりそこから閃光が放たれている。あたり一面の大気が、このとき不思議な香りを放ちだしたのには、みんなまたびっくりした。誰もが、今まで体験したこともなかったような、心地よい快感にうっとりしていた。誰かが「きれいな音楽が聞こえてこないか」と言いだした。私たちは、耳をすませた。すると不思議なことに、お寺で聞くはずの笛や太鼓やドラの音そっくりの音が、空の上から降ってくるように、たしかに感じられるのだ。私たちが驚き騒いでいると、その内にこの瞑想場にこもって修行している人たちまでもが、小屋の扉を開けて、外に出てきた。その人たちも、この光景には度肝を抜かれたようだった。「空に壮大なマンダラがあらわれた」とか、口々に驚きを語り合っている。ウーカルタクの修行者たちも、ゴンボ先生のお供でやってきた者たちも、このような脅威の現象を目のあたりにして、いつまでも空を見上げて、口々に驚嘆を語りあった。そして、この現象は、太陽が完全に沈んでしまうまで、何時間も続いたのである。』

『ところが、そんなことがあった四日後の10月25日の朝のことである。すでに山の端から昇った太陽が、さんさんと陽光を大地に降り注いでいるのに、同じ空からは雨が降りかかり、その異様な天候のさなか、大地震が大地をゆらゆらと揺さぶりはじめたのだ。空には不気味な音響がとどろきわたり、大地から閃光がほとぼしり出た。地震は長い間続いた。そして、大地の揺れがおさまったのちも、不気味なとどろきと閃光の瞬（またた）きは、やまなかった。私たち弟子は、この天変地異を体験して、すっかり恐ろしくなり、落ち着きを失って、みな大急ぎでゴンボ先生のいらっしゃる瞑想小屋の前に集まってきた。』

『皆は口々に「先生、これは一体どうしたことなのでしょう」と質問した。するとゴンボ先生は落ちついた様子で、こうおっしゃった。『心と存在の本性を見通してしまったラマが亡くなろうとしているときには、前兆としてよくこういう不思議な現象がおこるものなのだ。それが、私にいま起ころうとしている。』・・・と。

そして、ゴンボ先生は、そののちに大事な弟子のために最後の教えをし教え終わってから、亡くなるのだが、その際にも誠に不思議な現象が起こったのだが、この点については省略する。興味のある方は中沢新一の著書「チベットの先生」（平成27年2月、角川ソフィア文庫）を読んでもらいたい。神から選ばれた人が亡くなる時には、天変地異が起こるのだということが、私のいちばん言いたいことである。その天変地異は神の意志の現れであり、神は、大事な弟子のために最後の教えをし教え終わるまで死んではならぬということを意思表示なさるのであろう。ゴンボ先生はその神の意志のまま生き、そして死んでいかれた。[同じことが日蓮にも起こっている。](#)

なお、大勢の弟子どもの集まっているところで、神から選ばれた人が最後の説教をするときには、二番目の『』の不思議な現象が起こるらしい。これも神の意志で、みんなを祝福し、神から選ばれた人の応援をしているらしい。これと同じ現象が、[釈迦の最後の説教「法華経」](#)の場面で起こっている。

<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/hokerei.pdf>

第3節 チベット問題について

第1節「概要」で、「チベット問題」について触れた。チベット問題とは、中国のチベット支配にともなって発生した各種の問題をいう。中国政府とチベット亡命政府の間で発生した過去の歴史認識に関してさまざまな議論がなされてきたし、現在でもなお問題がないわけではない。

過去の歴史認識とは、チベットに対する中華人民共和国の支配・統治にともなって生じる各種の問題である。特にチベット独立運動への弾圧、弾圧にともなう中国軍によるチベット人の大量虐殺や人権侵害が大きな争点である。この中国軍による弾圧については、国際的には、中国側の自制を求める意見が強いが、中国の立場からすると、一連のチベット人による動乱は「反乱」であり、「虐殺」は反乱分子の「平定」とされる。国際的に中国側の自制を求める意見が強いとしても、チベットの独立を主張する国際世論はないので、チベット側としては、「高度な自治」を志向するしか方法はない。これがどうなるか、その問題が現在の「チベット問題」である。

私の見通しとしては、チベット側と中国側の話し合いを重ねて、双方が歩み寄れば、「高度な自治」の実現が可能な段階に来ている。

チベット問題に関する歴史認識については、次をご覧ください。

<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/tibereki.html>

ここでは、現在の「チベット問題」について述べ、当面の政敵課題は何かを考えてみたい。中国における当面の政治課題は、チベット自治区の安定だ。

新疆ウイグル自治区は、当面、今の政治を続けることである。改革すべき点は何もない。イスラム教の外国勢力との争いが続くだけだ。

内モンゴル自治区は、そういう外国勢力との争いはないので、次の節で述べるように宗教政策さえ変革すれば、それで、第三第三のシャングリラができる可能性がある。

また、チベット自治区については、政治的な当面の課題を解決すれば、チベット自治区に第二のシャングリラができる可能性がある。是が非でも、チベット自治区の安定を図らなければならない。

中国政府とダライ・ラマ14世の特使は、チベット問題の解決に向け2002年以降9回にわたり対話を継続してきた。それらの対話では、チベット側は、外交や国防を除く広範な分野でのチベット人の自治を求めている。問題は、その自治の内容である。

2008年11月の中国との協議でダライ・ラマの特使が提示した「真の自治についての覚書」によると、自治の内容としては、第一言語をチベット語とすることや文化の保護、チベット仏教の信仰の自由、教育、天然資源の利用、漢民族の移住の規制などを挙げている。さらに、自治を求めるその地理的な範囲は、チベット自治区だけでなく、その周辺も含むチベット高原一帯に及ぶ。こういう内容では中国政府はとてめ飲めないだろう。

9回目の対話は、2010年1月、北京でで開催された。チベット側は、中国側に対し、明文を提出し、チベット民族の自治に対する中国のスタンスを明確にするよう要求した。同対話の終了際、中国側が発表した声明文では「従来通り、両者間の見解の相違が鮮明になった」としている。

現在の「チベット問題」は、高度な自治とか真の自治とか中道政治と言われる中身である。私は、チベット側が国の直轄区域、国の義務教育、漢民族の移住を認めない限り、交渉は成立しないと思う。問題は、チベット側がそこまで妥協できるかどうかにかかっている。

ダライ・ラマ14世は2011年3月、自らの政治的権限を「チベット人が選挙で選ぶ人物」に移譲するよう提案した。ダライ・ラマ14世は、当時75歳で、CNNによると「適切な時期の引退」をかねてから表明していたという。

インド北部ダラムサラにあるチベット亡命議会は2011年5月28日、同政府の憲法に当たる「亡命チベット人憲章」を改正し、チベット仏教の最高指導者ダライ・ラマ14世の政治的引退を承認した。29日にダライ・ラマ14世による批准を受け、憲章の改正が成立した。

これで、ダライ・ラマ14世が持っていた政治的権限は、亡命政府の首相らに移譲されることとなった。そして、チベット亡命政府では2011年3月、新首相の選出が行われ、米ハーバード大学の研究員、ロブサン・センゲ氏が亡命政府の新首相に選ばれた。チベット亡命政府の選挙管理委員会によると、センゲ氏は同選挙でおよそ55%の票を獲得したという。

ロブサン・センゲ氏は、ハーバード大学卒で2011年現在43歳である。選挙で選出された後チベット亡命政権の主席を務め、2014年8月に3年の任期を終えた。そして、昨年2015年10月に首相予備選が行われ、今年の7月に首相本選挙が行われる予定である。

首相本選挙首相選は、昨年2015年10月に行われた予備選を勝ち抜いた現職の国際法学者、ロブサン・センゲ氏と議会議長のペンパ・ツェリン氏の戦いで、予備選で66%強を得票したセンゲ氏が有利とみられている。今回は、チベット仏教の最高指導者、ダライ・ラマ14世が政治からの引退を表明してから2度目、正式に政治権限を首相に譲って

からは初めての選挙となる。有権者は、各国の亡命チベット人約9万人で、首相の任期は2016年8月から5年間である。

首相候補のセンゲ氏とツェリン氏はいずれもチベットについて中国からの独立ではなく、「高度の自治」を求めており、どちらが当選しても亡命政府の従来の方針に変更はなさそうだ。完全独立を主張する候補は予備選段階で姿を消した。ただ、中国政府は高度の自治も事実上の独立とみなしており、今のところ、習近平政権はチベット亡命政府との対話の扉を閉ざしたままだ。

センゲ氏とツェリン氏のどちらが新首相になるかわからないが、上述したように、私は、チベット亡命政権の新首相が国の直轄区域、国の義務教育、漢民族の移住を認めない限り、習近平は納得しないと思う。問題は、ダライ・ラマ14世から政治権力を委譲された新首相がそこまで妥協できるかどうかにかかっている。ダライ・ラマ14世の政治的権力はなくなったが、政治的権威は未だ残っているようなので、私は、新首相がそこまで妥協できるかどうか、不安である。

第4節 宗教政策

チベット仏教の最高指導者、ダライ・ラマの地位はその死後、生まれ変わりとされる子どもがあとを継ぐ慣習がある。

2014年9月26日の定例記者会見で、中国外務省の洪磊報道官は14世の死後、15世を認定する際にもこの慣習が守られるべき、と語った。過日、インドに亡命中のダライ・ラマ14世は、15世の認定について、自身が90歳になった時点で、チベット高僧と協議し、輪廻転生による継承制度を続けるか判断したい、と語っていた。中国外務相の談話は、この発言をけん制し、15世認定の権限を実質的に中国政府が握っていることを示したものだ。

チベット仏教には、ダライ・ラマに次ぐパンチェン・ラマという高位の称号がある。このパンチェン・ラマも生まれ変わりを探すことで、継承される。

パンチェン・ラマ10世死亡後、ダライ・ラマなどチベット仏教界はゲンドウン・チューキ・ニマという6歳の少年を11世として認定した。これに対し、チベットの精神的な大きな支柱を支配下に置きたい中国政府は独自にギェンツェン・ノルブという少年をパンチェン・ラマ11世に擁立した。さらに中国政府はダライ・ラマ側のパンチェン・ラマ11

世、ゲンドウン・チューキ・ニマ少年とその家族を拉致し、隔離している。少年らの失踪について、中国政府は当初、関与を否定したが、その後「保護している」と発表。チベットでは少年に対する洗脳が行われているのではないかと心配されている。

中国政府は、無神論を信奉する共産党の一党独裁ながら、チベットでの転生制度を容認する立場に転身したのだ。中国当局は2007年に「チベット仏教の活仏輪廻管理条例」を作り、チベット仏教の後継者選びと最終認定に当局が参加することを明記した。チベット仏教への政治介入と批判されるが、最大の眼目はダライ・ラマの後継を中国政府主導で選定することにある。「ダライ・ラマ15世」を親中派の宗教指導者に育成することで、チベットの安定統治を図る考えだ。亡命中のダライ・ラマの発言は、この中国政府の策略を熟知したもので、転生制度の廃止という重大決断を述べたものである。

今後、中国当局とチベット亡命政府の新たな確執を招くことは避けられない。ダライ・ラマ15世についても、同様に、中国政府による「認定」や拉致が行われる可能性は否定できない。

コロンビア大学のチベットの専門家ロバート・バーネット氏は「中国政府がダライ・ラマ14世の発言を無視し、独自に選んだダライ・ラマを擁立しても、チベットの人々は受け入れないだろう」と指摘している。しかし、私は、必ずしもそうは思わない。ダライ・ラマやそれに次ぐパンチェン・ラマを、拉致という強引な手段によってでにしろ、親中派の宗教指導者に育成することで、少なくともダライ・ラマやそれに次ぐパンチェン・ラマは、中国政府との摩擦を生じることなく、修行に励むことができる。長年修行を積んでいけば、チベット仏教の伝統を踏まえた立派な僧侶になっていくので、やがてはチベット人の尊敬を受けるようになっていくのではないかと私は思う。大事なものは、チベット仏教の経典とそれに基づいて行われる伝統的な修行の方法である。宗教的な権威というものは、個人の生まれがどうのこうののではなく、個人の資質と修行の方法によって身につくものである。親中派の宗教指導者が誕生することによって、チベットの安定統治を図ることができる。反中国派のダライ・ラマやそれに次ぐパンチェン・ラマがいる限り、チベットの安定はない。

チベットが、その信仰の点でも、中国政府が積極的にその保護育成を図ることが大事である。毛沢東以来、中国政府は無神論の立場を取ってきたが、それを転じて、チベット仏教のみならず他のすべての民族宗教の保護育成を図るといふ宗教政策に転ずれば、中国は、

天命政治の国にふさわしい素晴らしい国になっていくだろう。そして、国内いろんなところに第二第三のシャングリラができていくに違いない。

シャングリラの大事な条件の一つに信仰の問題がある。漢民族の宗教・道教を国教としながらも、他の民族宗教をも大事にすることができるか？それが可能であれば、風光明媚なところに数多くのシャングリラができるだろう。それが天命の国であり老子の国である中華に対する私の期待だ。

民族にはそれぞれ特有の宗教がある。

中国の中央政府は、現在、無神論の立場をとって、けっこう厳しいコントロールを行っている。それはそれで良いとして、今後は、民族宗教の保護育成を積極的に行うことが望ましい。特に、漢民族の道教とチベット民族のチベット仏教は、中国の発展のみならず世界平和に大きく貢献することができると思うからだ。

中国中央政府の支援のもと、道教とチベット仏教がより盛んになれば、道教寺院やチベット仏教寺院を中心として、第二第三のシャングリラができるであろう。

シャングリラは、世界における国土づくりの理想となる。それを中国が示すのだ。世界のどの国もこういうことはなしえない。